

本誌における実践報告とは「糖尿病看護に関する実践の報告で、糖尿病看護の発展に寄与すると認められるもの」である。実践報告には以下が含まれる。なお事例研究は研究論文とみなし、実践報告には含めない。

・事例報告

ある事例に有用であった実践内容を振り返り、ケアのプロセスや成果、課題について記述し、得られた結果の意味を考察したもの。

・活動報告

医療の質の改善や、組織に求められる役割遂行を目的に、組織や実践上の課題を現状分析し、組織的・体系的な取り組みとして新しい試みやプログラムを計画・実施し、その成果を報告したもの。

<事例報告や活動報告の構成>

1. 表題
2. 緒言
3. 倫理的配慮
4. 事例紹介／活動紹介
5. 事例の展開／活動の経過
6. 考察
7. 引用文献リスト

<事例報告や活動報告の執筆のポイント>

1. テーマの設定から表題の設定まで

1) 報告したいテーマは事後的に発生する。

実践しているときには意図的・自覚的ではなくても、結果的に良い実践であったことの気づきがあれば、そこを出発点として実践内容を振り返ってみる。

振り返りの結果、これまでの患者とのかかわりとの違いや良かった点や、成果を発信・共有することで他の看護師に役立ててもらえることがあるのであれば、報告の価値がある可能性が高い。

2) テーマを焦点化する。

実践時は複合的・多面的な課題や介入を扱っていても、実践報告にそのすべてを盛り込もうとするのではなく、報告すべきポイントとなることがらを厳選し、特定する。

3) 焦点化したテーマのキーワードを見つける。

対象者の特徴、実践方法のポイント、実践目標のそれぞれを短い言葉で表現する。

例)

対象者の特徴：認知症、2型糖尿病、介護者、在宅

実践方法のポイント：オンラインによる療養指導

実践目標：インスリンの安全な使用

3) キーワードを並べ替えて具体的かつ明確な表題を作る。

表題には実践報告の種類を含める。

例)

事例報告：認知症をもつ2型糖尿病患者の介護者に対するオンライン・サポート～

在宅でのインスリンの安全な使用に向けて～

2. 緒言

1) はじめに文献検討を行う。

報告しようとする事例や活動を取り巻く医療の現状について調べ、疫学データなど信頼できる最新の数値情報をおさえる。

同様の事例や活動について先行文献がないかを確認し、その内容を精査する。

理論に基づいた実践内容の場合は、その理論について調べる。

文献検索では、テーマのキーワードを用いた検索を必ず行う。

2) 報告の意義を見出す。

同様の先行文献がある場合には、自分たちの実践内容との違いを精査し、自分たちの実践が、先行文献の限界や課題をどのように克服しているのか、を明らかにする。

先行文献がない場合には、自分たちの実践内容をはじめて報告することが何の役に立つのか、を明らかにする。

3) 論旨の一貫性に留意して記述する。

表題（テーマ）と内容的に一致していることを念頭に、テーマのキーワードを文中に使いながら、文献検討の結果と報告の意義について記述する。

報告しようとする内容と関係がない情報は、看護実践上に重要と思えることであっても記載しないように注意する。

緒言で背景を記述する際は、自分が所属する施設や部署についての説明は原則含めない。こうした情報は、事例紹介や事例展開の項で説明する。

4) 目的を書く。

緒言の最後に目的を記述する。

実践報告の目的では、研究論文とは異なり、明らかにしようとしたことではなく、「行った実践の何について報告するのか」を端的に表現する。

例)

「〇〇の実践の成果とその意味について報告する。」

「実践を振り返り、〇〇の知見を得たので報告する。」

3. 倫理的配慮

安全性、自由意思の尊重、プライバシー保護の観点から、報告にあたって講じた倫理的配慮について本文中に記載する（対象者の同意取得の方法、個人情報の管理方法、対象者への負担や不利益への配慮、社会的弱者への特別な配慮、等）。

事例報告や活動報告は、研究倫理審査委員会の審査は原則不要であるが、倫理的な配慮についての記述が不十分・不適切な場合は、本誌に掲載できないことがある。

4. 事例紹介／活動紹介

1) 取り上げる対象の数を決める。

取り上げる対象の数について、テーマに照らして単一か複数かを決める。

<複数の対象を取り上げる場合の注意点>

- ・対象間で記述の仕方をそろえる。
- ・対象の共通点を意識して記載する。

同じ課題を抱える対象に対する同じ実践 ⇒ 実践成果の再現性や比較が強み

同じ課題を抱える対象に対する異なる実践 ⇒ 実践方法の比較が強み

課題が異なる対象に対する同じ実践 ⇒ 実践方法の適用範囲の広さが強み

課題が異なる対象に対する異なる実践 ⇒ 報告の焦点を再考すべきかも

2) 対象の情報を記述する。

対象の情報は、実践の目的に照らして過不足なく記述する。

対象の個別の条件や状態がわかるデータ（言動、観察情報、等）を含める。

情報を記述する際は、個人情報に留意した表現を選ぶ（名前、年齢、職業、など）。

著者の解釈や感想を含めず、事実に忠実に客観的な記述を心掛ける。

5. 事例の展開／活動の経過

1) 記載する前に構成を考える。

実践のプロセスについては、時系列な記述がよいのか、伝えるべきポイントに沿って情報を整理して再構成すべきかを検討する。構成の例として、看護過程に沿った記載、用いた理論に沿った記載、対象の変化のタイミングで時期を分けた記載、などが考えら

れる。

2) 実践の具体を記述する。

報告のテーマに合致するように記述する。

読者が追体験できるように、豊富な情報で実践方法や対象の反応を記述する。

読者の参考になり、真似してみたいくなるように記述する。

著者の感想や評価ではなく、「(何を理由に) 何を行ったのか」「どのような反応が得られたのか」など、事実に忠実な記述を心掛ける。⇒ 実践で得られた結果の解釈や評価は「考察」で記述する。

複数の対象への実践では、可能な限り対象間で記述の仕方をそろえる。

以下の内容を含める。

(1) 事例や活動対象の課題 ⇒ 「事例の紹介/活動紹介」の項で記載してもよい。

対象が抱える課題に対するアセスメント、看護診断、等

(2) 実践目標 ⇒ 課題と対応させる。

課題に照らしてその実践は何を目指したのか、看護目標、評価指標、等

(3) 実践内容 ⇒ 実践目標と対応させる。

いつ、どこで、誰が、誰に、何を、どのように行ったのか、看護計画、等

なぜこの実践内容が実践目標の達成につながると考えられるのか

⇒ 読者に理解と応用を促す

(4) 実践の結果や成果

実践目標の達成状況、評価指標の変化状況、等

6. 考察

1) 得られた知見を要約する。

報告のテーマを念頭に「事例の展開/活動の経過」で示した事実(どのような対象に何を行ったか、どうなったか)を端的に説明する。

2) 得られた知見の意味を説明する。

実践で得られた結果や成果(=事実)を解釈し、評価する。

結果や成果の理由や機序(なぜそのような結果や成果が得られたのか)について論理的に説明する。

報告する実践の看護上の意味を説明する。理論を用いて実践の意味を解釈することも可能である。

3) 看護への示唆を説明する。

報告する実践によって、糖尿病教育・看護の質向上のために、どのような示唆が得ら

れたのかを説明する。

報告する実践が今後どのように役立つかの説明する。

報告内容を参考に読者が実践する場合の注意点（適用可能な対象の特徴など）を示す。

7. 引用文献リスト

学会誌の投稿規定に沿って記載する。

8. その他

報告全体を通して、テーマに合致した論旨の一貫性に留意して記載する。

わかりやすい文章表現を心掛ける。

テーマのキーワードが、本文中に適切に含まれていることを確認する。

備考

本資料の作成に当たっては、第36回日本がん看護学会学術集会の編集委員会主催研修会での片岡純先生によるご講演内容を参考にした。